公益財団法人倶進会 第114回 公開セミナー　２０１６度第２回目のセミナー

《日 時》 ２０１６年7月2日（土） １３：００～１５：００

《場 所》 公益財団法人倶進会事務所（営団地下鉄丸の内線・四谷三丁目駅より徒歩３分）

新宿区左門町９番地 玉盛ビル３０２号

《題 目》 「新渡戸稲造に学ぶ～ 暇げな風貌 ＆ 偉大なるお節介～」

《発題者》 樋野 興夫 氏 （順天堂大学医学部病理・腫瘍学講座教授、医学博士）

（一般般社団法人がん哲学外来理事長）

[講師略歴]： 略歴：1954年、島根県生まれ。順天堂大学医学部病理・腫瘍学講座教授、順天堂大学大学院医学研究科環境と人間専攻分子病理学教授、医学博士。

一般社団法人がん哲学外来理事長。日本癌学会理事、第99回日本病理学会総会会長、日本家族性腫瘍学会名誉理事長、がん哲学外来市民学会代表ほか。

2008年日本で初めて「がん哲学外来」を開設し、翌年NPO法人の設立を経て、2013年一般社団法人がん哲学外来を設立。

不安を抱えた患者さんに対話を通じて支援した思いでの講演活動は、大きな反響を呼び、全国に「がん哲学外来」が開設。されている。

《内 容》

「泣くのに時があり、ほほえむのに時がある。嘆くのに時があり、踊るのに時がある」の厳しい現実である。今は、まさに「泣く時、嘆く時」である。

1933年3 月3日にも、今回と同様に三陸で地震の大災害があったと記されている。

その時、新渡戸稲造（1862-1933年）は被災地宮古市等沿岸部を視察したとのことである。その惨状を目の当たりにした新渡戸稲造は「Union is Power」

（協調・協力こそが力なり）と当時の青年に語ったと言われている。まさに、今にも生きる言葉である。

広辞苑によれば、国手とは「国を医する名手の意」、名医また医師の敬称とあり、「医師は直接、間接に、国家の命運を担うと思うべし」とのことである。

医師の地上的使命と同時に「日本の傷を医す者」（矢内原忠雄: 1893-1961 年、1945 年 12 月 23 日の講演）が蘇った。

「理念」：3 カ条

（1）世界の動向を見極めつつ歴史を通して今を見ていく

（2）俯瞰的に病気の理を理解し「理念を持って現実に向かい、現実の中に理 念」を問う人材の育成

（3）複眼の思考を持ち、視野狭窄にならず、教養を深め、時代を読む「具眼 の士」の種蒔き

「風貌と胆力」：7 カ条

（1）自分の研究に自信があって、世の流行り廃りに一喜一憂せず、あくせくしない態度

（2）軽やかに、そしてものを楽しむ。自らの強みを基盤とする。

（3）学には限りないことをよく知っていて、新しいことにも、自分の知らないことにも謙虚で、常に前に向かって努力する。

（4）段階ごとに辛抱強く、丁寧に仕上げていく。最後に立派に完成する。

（5）事に当たっては、考え抜いて日本の持つパワーを充分に発揮して大きな仕事をする。

（6）自分のオリジナルで流行を作れ！

（7） 昔の命題は、今日の命題であり、将来のそれでもある。

人間は、自分では「希望のない状況」であると思ったとしても、「人生の方からは期待されている存在」で

あると実感する深い学びの時が与えられている。その時、「その人らしいものが発動」してくるであろう。

「希望」は、「明日が世界の終わりでも、私は今日りんごの木を植える」行為を起こすものであろう。

『向上心のある虫「新渡戸稲造の学び」＆ 俯瞰的ながん病理学者「吉田富三（1903-1973）の学び」』からみる「現代の日本社会の病理」の視点は、「Origin of fire」の如く「医療の隙間を埋める」試みとして全国に広がることが期待される。

（１）「明晰な病理学的診断」

（２）「冷静な外科的処置」

（３）「知的な内科的診療」

（４）「人間力のある神経内科的ケア」

（５）「人間の身体に起こることは、人間社会でも起こる＝がん哲学」

1860 年代遣米使節団（勝海舟らがいた）が、ニューヨークのブロードウエイを行進した。彼らの行進を見物した詩人ホイットマンは、印象を「考え深げな黙想と真摯な魂と輝く目」と表現している。この風貌こそ、現代に求められる「医療者の風貌」でなかろうか。

「日本国のあるべき姿」として「日本肝臓論」を展開する。日本国＝肝臓という「再生」論に、行き詰まりの日本を打開する具体的なイメージが獲得されよう。

人間の身体と臓器、組織、細胞の役割分担とお互いの非連続性の中の連続性、そして、傷害時における全体的な「いたわり」の理解は、世界、国家、民族、人間の在り方への深い洞察へと誘うのであろう。昔って新渡戸稲造は国際連盟事務次長時代に、「知的協力委員会」を構成し知的対話を行った。

そのメンバー中には、当時の最高の頭脳を代表するアインシュタイン、キュリー夫人もいたことは特記すべきことである。

今こそ国際貢献として「２１世紀の知的協力委員会」の再興の時である。

（１）賢明な寛容さ（the wise patience）

（２）行動より大切な静思（contemplation beyond action）

（３）紛争や勝利より大切な理念（vision beyond conflict and success）

（４）実例と実行（example and own action）

すべての始まりは「人材」である。行動への意識の根源と原動力をもち、「はしるべき行程」と「見据える勇気」、そして世界の動向を見極めつつ、高らかに理念を語る「医療者」出でよ！

偉大なるお節介症候群

１．暇げな風貌

２．偉大なるお節介

３．速効性と英断